

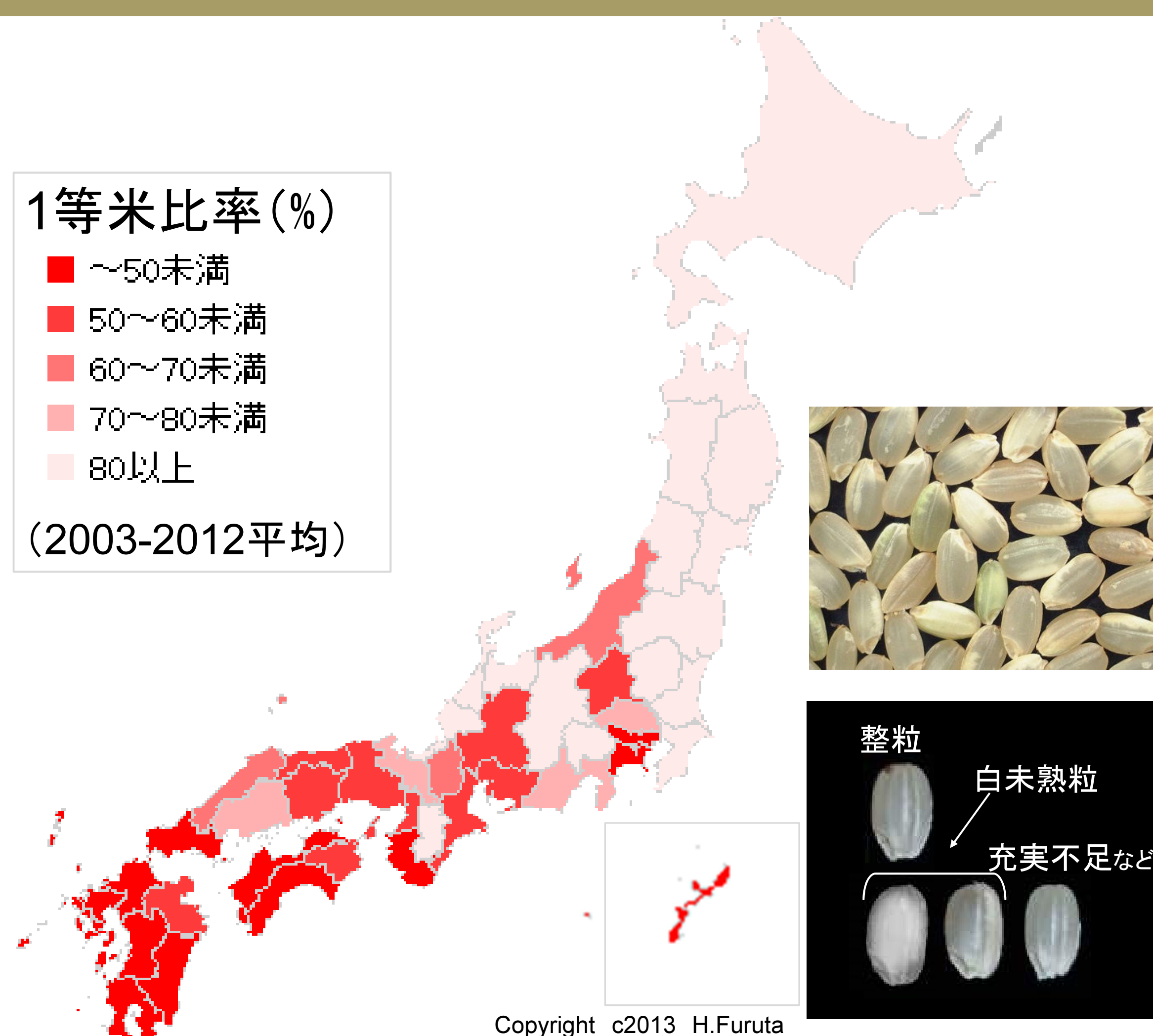
高温による水稻の品質低下対策

滋賀県農業技術振興センター、福岡県農林総合試験場、長崎県農林技術開発センター、
(独)農研機構 九州沖縄農研センター



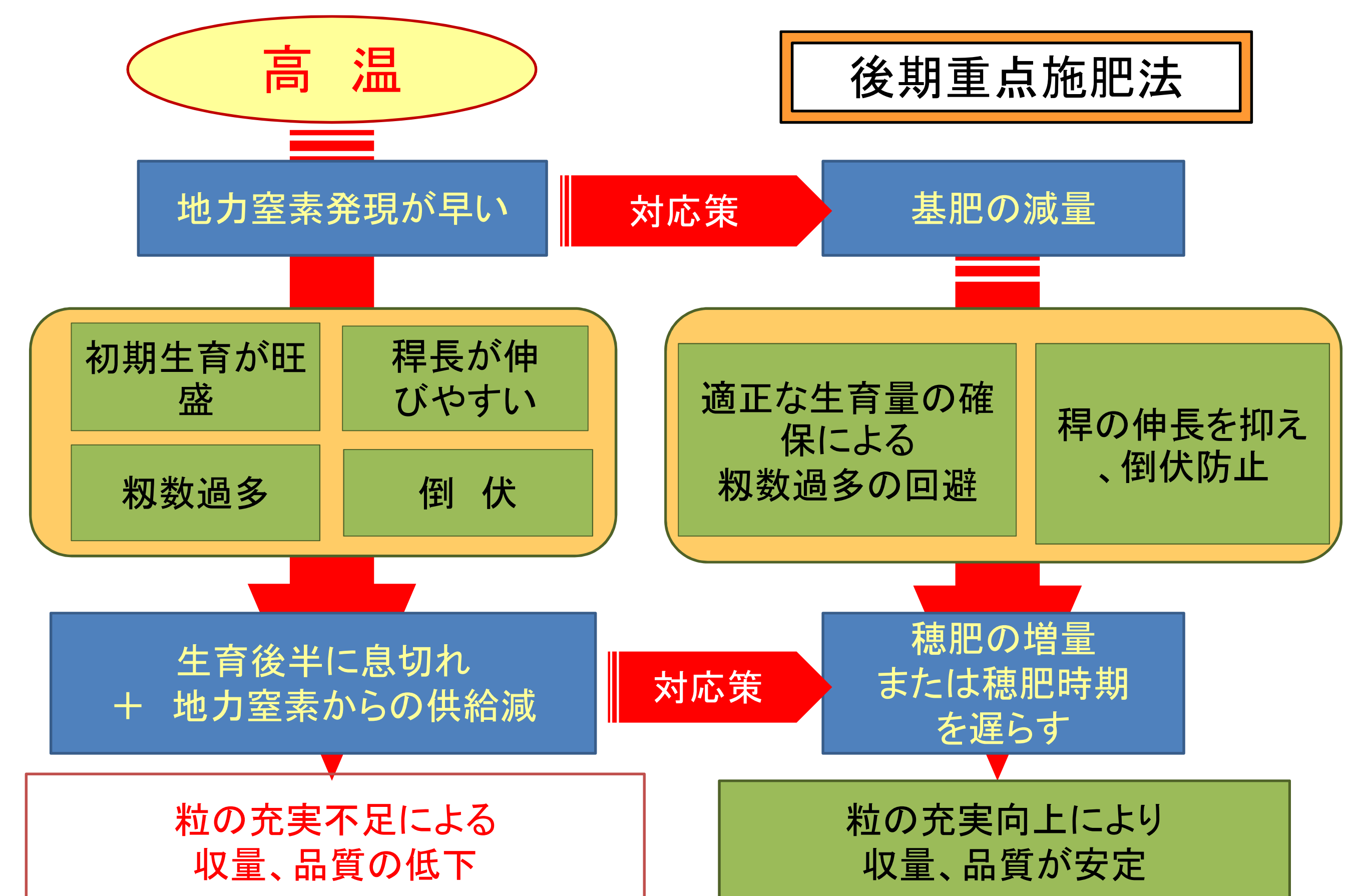
近年西日本を中心に広い地域で、気温上昇による白未熟粒などが多発し、玄米の品質低下が問題となっています。このため、今までの品種を対象に施肥の改善法を開発するとともに、新しい高温耐性品種に適した移植時期などの作期策定を行いました。

1 最近10年間の1等米比率の地域差



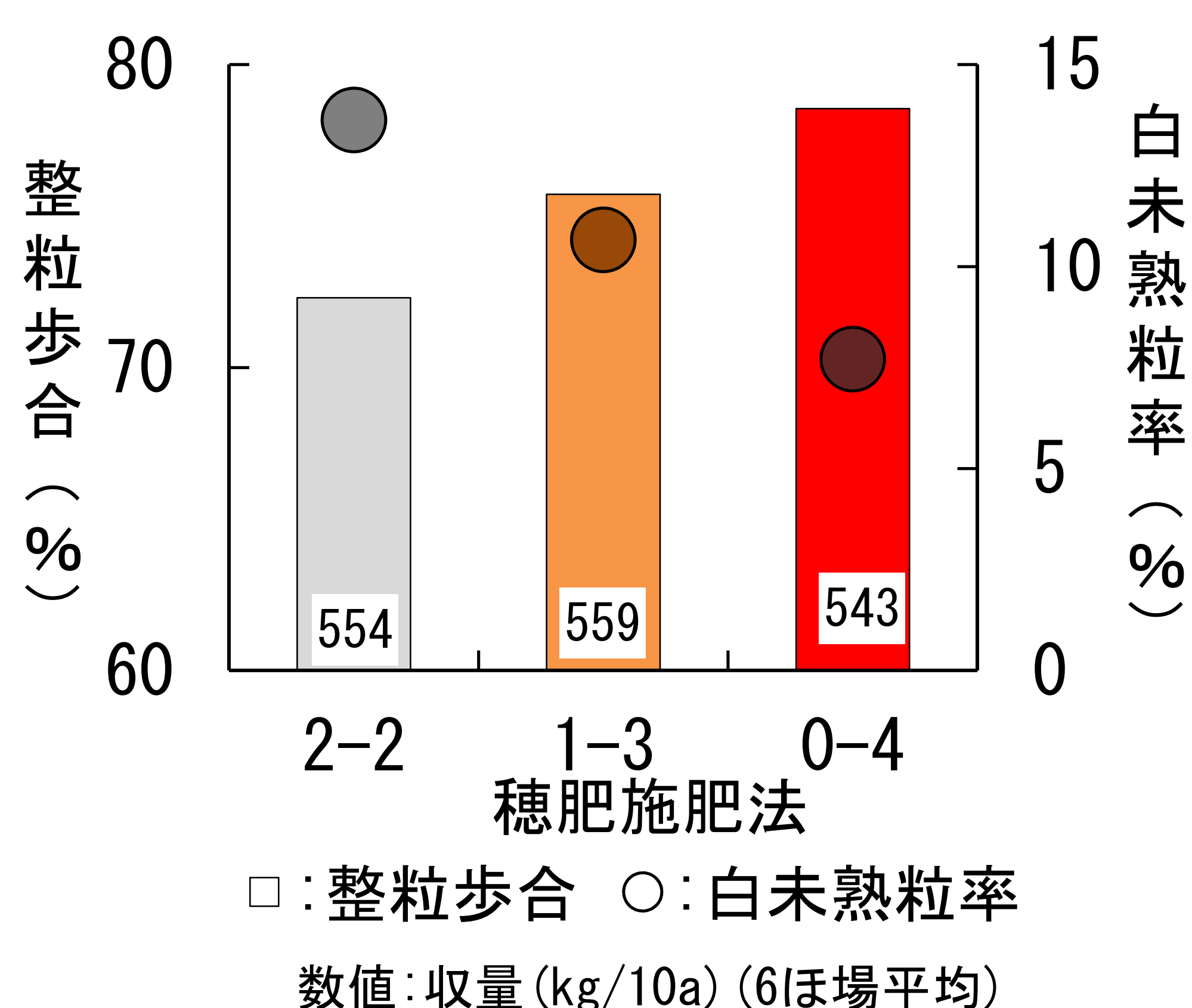
西日本では、近年の高温で白未熟粒が多発し、品質の低下が問題になっています。

2 後期重点施肥の効果フロー図(福岡)



高温では、初期生育を抑え、後半に栄養状態を良好にする後期重点施肥が有効です。

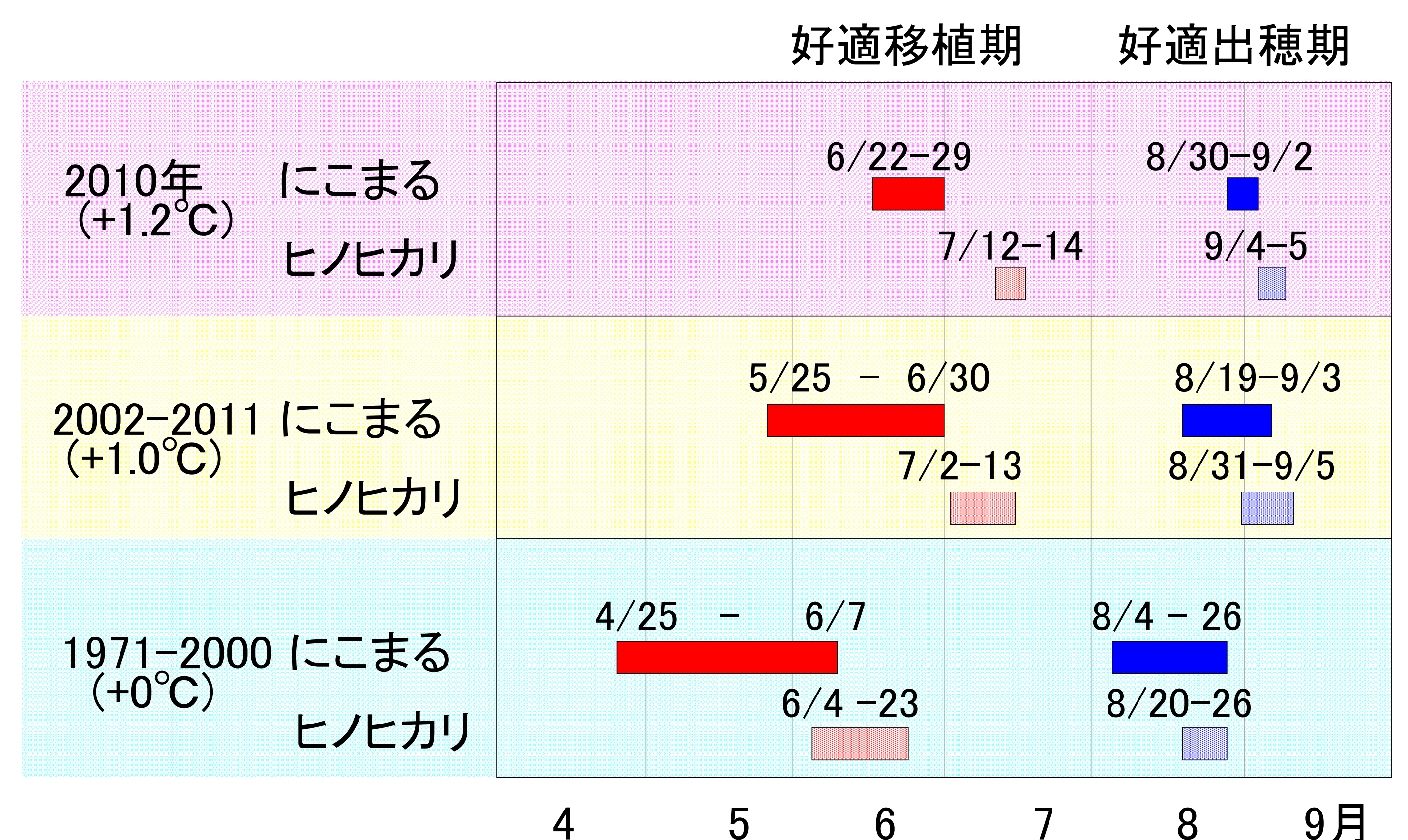
3 後期重点施肥の効果(滋賀)



穂肥施肥法(幼穂形成期7-14日後Nkg/10a): 慣行は2-2で、1-3、0-4 となるほど後期重点施肥を表す。2012年 滋賀県現地試験結果。

「コシヒカリ」において、同じ施肥量でも後期追肥の割合を増やすことで、白未熟粒率が半減し、整粒歩合が9%向上しました。

4 近年の温暖化と品質から見た適作期(長崎)



気温は、1971-2000年の稲作期間(6/20-10/10)の平均気温(24.7°C)との差を示す。

「ヒノヒカリ」では高温条件で品質を保つための移植適期幅が狭くなりますが、「にこまる」の採用で適期幅が広がります。